

認定地域の九州3県の中学生が 国東市に集って世界農業遺産を語る



九州で世界農業遺産に認定された大分、熊本、宮崎各県の中学生たちが、関連学習の合同発表会を1月14日、アストくにさきで行いました。同発表会は、「国東半島宇佐地域世界農業遺産中学生サミット」として、地元自治体や関連団体でつくる「国東半島宇佐地域世界農業遺産推進協議会」と県教育委員会が主催し、平成27年1月以来2回目の開催となりました。

今回、国東半島宇佐地域の6市町村の中学校に、初めて阿蘇地域（熊本県）と高千穂郷・椎葉山地域（宮崎県）の中学校が加わり、合計31校から約180名の中学生が参加しました。アストホールで行われたステージ発表では、安岐中学校の1年生6人がしいたけ農家の方から聞き取った栽培方法や栽培にかける思い、森の保水力とため池とのつながりについて実験映像を交えて発表しました。



▲会場には約400名の方が参加



▲ステージ発表をする安岐中学校の生徒

次に会場をアグリホールに移して、ポスターセッションが行われました。国見中学校は「ため池の探検や榎米土手つき唄の踊りを習ったこと」、国東中学校は「修正鬼会と農業文化後の結びつきを学び、修正鬼会のモザイクアートの作成」、武蔵中学校は「地元シイタケ農家に職場体験に行き、後日シイタケを用いた郷土料理を作ったこと」について発表しました。



▲ポスターセッションで発表する(左から)国見中、国東中、武蔵中の生徒

再びアストホールで行われたステージ発表では、熊本県と宮崎県の中学校が、それぞれ地域の伝統農法で作られた特産品の良さを話しました。その後行われた意見交換では、国東半島宇佐地域世界農業遺産推進協議会の林会長をコーディネーターに、8名の代表者が登壇し、「自分達の地域と世界とのつながりをどのように感じているのか」について自分の考えを述べました。

講評では、国際連合食料農業機関駐日連絡事務所の渡邊和真副所長は、「郷土が育んできた農業遺産という宝を活かすかどうかは私達次第であるという意見も出ました。その気持ちを大事に、今後も学んで行ってほしい」と述べました。最後に「故郷から学び、故郷を守り、故郷と共に成長していく」とサミット宣言をしました。



▲意見発表する安岐中1年の松原綾乃さん



▲渡邊副所長の講評の様子



▲「サミット宣言」を英語で述べた国見中の生徒

6 移住体験日帰りバスツアー

福岡市を対象にした日帰りバスツアーを、12月4日に実施しました。現代アートと地域おこしが融合している成仏地区や先輩移住者のお店を見学しました。



5 TURNSツアー

移住・田舎暮らし情報サイトのTURNS(ターンズ)企画の体験ツアーを11月12日・13日の1泊2日で実施しました。市内で活躍している移住者の方や移住後にできる仕事を見学しました。



その2 国東市地域おこし協力隊 新ホームページ公開

国東市の地域おこし協力隊が、市民のみなさんとひとつながりたいたいという思いで、ウェブサイト「国東+」(くにさきプラス)を起ち上げました。

このウェブサイトは、投稿された写真や記事で運営されていくものとなります。Facebookからでは、(#国東写真)とタグを付けて投稿していただくだけで簡単に掲載ができるようになっています。

その他にも、たくさんのコンテンツを用意していますので、ぜひ一度ご覧ください。

※ご応募の際は、名前(ニックネーム可)、場所の記載をお願いします。



ホームページ URL
<http://kunisakiohen.wixsite.com/kunisaki-plus>

問合せ 国東市役所 活力創生課 ☎ 0978-72-5183

新着情報

その1

来て・見て・知って 国東半島暮らし体験ツアーを開催

大分の空の玄関である大分空港を利用して、関東・関西方面を対象に国東市と杵築市合同で、2月25日・26日の2日間で移住体験ツアーを開催します。国東半島の自然や風土を十分に堪能できるものとなっています。



今後の目標



国東市の究極の目標は、人口の1%、つまり現在、約3万人の人口なので毎年約300人の人口増加に取り組むということです。この数字を達成するには、現状ではなかなか難しい状況ですが、その状況を打開する一つの方法として、移住者の獲得、特に就労現役世代である若者の積極的な受け入れに取り組んでいます。移住希望者の多くは、幾つかのまちを候補地として選び、実際にその地を巡り移住します。国東市では、首都圏でのセミナーの開催や、住むかどうか判断する材料として何度も訪れていただき、お試し移住体験等を行うことができる体制を整え、住宅の購入補助金制度や移住後の創業支援制度を整えました。これらの取り組みが、移住して来た方の移住満足度につながり、移住者自身が国東市の住み良さを広くアピールしていただくことに繋がってきています。この受け入れた移住者の方が新たな移住者を呼び込む流れが、やがては目標達成の原動力になっていくと考えています。